

前回紹介しました比叡山延暦寺を建立したのが伝教大師最澄であることは、よく知られています。では、天台宗の開祖である最澄とはどのような人物だったのでしょうか。

最澄は、奈良時代後半の守護景雲元年（767）に、近江国滋賀郡古市郷（現在の大津市南滋賀から石山にかけての一带）で、三津首百校の子として生まれました。今の大津市坂本にある生源寺が生地ともいわれています。幼名を広野といい、生年については天平神護元年（766）との記録もあります。

最澄は宝亀9年（776）に近江国分寺に入り、行表の弟子となり、仏教を学びます。4年後、15歳で得度して僧籍に入り、このときに法名

を「最澄」と名乗ったといわれています。延暦4年（785）には奈良の東大寺戒壇院で二百五十戒を学び具足戒を受け、国から認められた僧侶となります。その後、奈良の

国家仏教とは距離を置き、20歳で比叡山に入山します。比叡山では、願文と呼ばれる5つの誓願を立て、それが成就するまで下山しないと、法華経を根本經典として修行しました。延暦7年（788）には延暦寺根本中堂の前身である一乗止観院を建て、自刻の薬師像を安置し、法灯を掲げたといわれています。延暦

21年（802）には和氣弘世らの願いにより、比叡山を下り、京都高雄山寺（現在の神護寺）において法華三大部の講義を行い、修行の成果を示



生源寺の最澄像

天台宗の開祖 最澄



最澄生誕の地とされる生源寺

しました。時は桓武天皇によって奈良から長岡京、そして平安京へと都が移され、新たな政治体制を迎えています。こういった時代背景もあり、最澄は桓武天皇の信任を得て、唐で天台を学ぶために中国還学生（短期の留学生）として、延暦23年（804）

に空海、通訳義真とともに遣唐使船に乗り込み、唐に渡りました。唐では8カ月間で天台山など天台教義を、越州では密教を学びます。翌年帰朝した最澄は、高雄山寺で、奈良の学僧たちに日本で初めて密教の灌頂を実施します。大同元年（806）

には、仏教各宗で毎年一定の人数に限って朝廷から許可されていた得度者である年分度者の割り当てを、南都六宗に加えて天台法華宗にも2人割り当てよう請願し、国家的な公認を受けました。この年が日本における天台宗の開宗とされています。

その後、最澄は、弘仁9年（818）から翌年にかけて天台仏教と密教の教育制度や大乘戒の独立を願う『山家学生式』と呼ばれる年分度者を育成することを目的とした一連の上表を行い、弘仁11年（820）には『頭戒論』を著して比叡山に大乘戒壇の公認を願います。しかし、大乘戒壇の許可を得ることなく、その2年後、弘仁13年（822）に比叡山で亡くなりました。同年、死後に大乘戒壇は朝廷から許可され、翌弘仁14年（823）、嵯峨天皇より、初めて年号名から「延暦寺」の寺号を賜り、貞観8年（868）、死後44年経って最澄は伝教大師の諡号を賜りました。（財団法人滋賀県文化財保護協会 中村健一）

大乘戒壇建立 没後に実現